

# 安吾とイノシシ

## 「古都」「孤独閑談」における食の風景

石月 麻由子

### 一 はじめに 安吾と食

食が生きるための単なる必要条件にとどまらず、いつ・どこで・誰と・何を・どのように食べるか、といった時間や諸条件と切り離せないものである以上、生そのものの一つの位相であることは言うまでもない。禁断の果実や桃太郎のきびだんごなど、古今東西の神話や民話伝説において、食が必要不可欠なファクターとしてしばしば表象されるのも、それが人間の歴史や文化の深層に根ざしたものであるからにはかならない。そもそも、食行為の普遍的で共有可能なイメージは、共同体の記憶や価値観、宗教上の教義を伝承するのに有効であった。いつしか、単なる生理的欲求と区別された食は、哲学的思想性す

らも帯び、料理＝技術の革新はもちろん、芸術の領域、民俗の領域、さらには粗食／美食ブームといった今日の社会現象にまでその影響を及ぼしている。

では、日本の近代文学において食の光景はどのように抽出されているのだろうか。それについて、大河内昭爾は「味覚文学」というジャンルを設定し、日本近代文学を「粗食派」文学と「美食派」文学とに弁別して捉えている<sup>1)</sup>。

粗食派の文学風景には多く人生派の哀歎がもりこまれ、風物詩的趣向がそえられる。離別している夫婦の断ちきれぬ情感を、さながら大阪の夏の風物詩として描いた上司小剣「鱧の皮」(大正三年)を頂点に、粗食派は大方自然派の作家によって描かれてきた。美食派はさしずめ谷崎潤一郎の「美食倶楽部」(大正八年)や岡本かの子「食魔」(昭和

十四年『鮎』所収)に描かれる、美食に耽溺し、憑かれた人々の畸形的美意識がデカダンスの文学となる唯美派の作家の側のものであった。

「自然派」や「唯美派」といった文学史的事項をおさえつつ、そこに食をめぐる独自の観点を重ねる大河内は、ほかに森鷗外「牛鍋」(『心の花』一九一〇・一)、矢田津世子「茶粥の記」(『改造』一九四一・二)、耕治人「料理」(『作品』一九五〇・四)などを挙げ、これらは文学的テーマの変奏としての食が描かれている点で「味覚文学」の代表的作品であると指摘する。

この意味において、坂口安吾の作品に、かつての恋人であったという矢田津世子に比肩するような「味覚文学」があるとは断言し難い。もとより、食を文学的核心に据えた安吾作品が見当らないのだから、「安吾文学における食の思想」という問題系自体が研究の対象にされてこなかったのは当然の話である。それでは、安吾作品に食の光景が全く描かれていないのかというと、もちろんそのようなことはない。例えば、戦後であれば、食について書かれた作品をいくつか挙げることができる。私見では、一九四八年から常用し始めた覚醒剤、睡眠剤、大量のアルコールによる身体の変調、あるいは自らの文学的新機軸を求めて着手したルポルタージュや晩年のライフワークとなった古代史執筆のための実地踏査旅行が、安吾の食の想像力をかきたせることになった具体的な出来事であるように思われる。

「わが工夫せるオジャ」(『美しい暮しの手帳』一九五一・二)は、

吐血した安吾が傷んだ胃のためのオリジナル・オジャと自身の食生活とを紹介したエッセイであり、身体的実感から切り離すことのできない食の光景が描かれている。このような視点は、史実の細部や風土的特質を史書や実地検分からだけではなく、食欲という身体感覚から読み解こうとする安吾の独特なアプローチの手法と重なり合う。「安吾新日本地理」(『文藝春秋』一九五一・三丁一一)や歴史小説『決戦川中島 上杉謙信の巻』(『別冊文藝春秋』一九五三・八)には、取材で訪れた郷土の食をおして、正史が隠蔽した謎や歴史上の人物の内面に肉迫しようとする様相が描かれている。この問題は本稿の主旨ではないので、深く立ち入るつもりはない。ただ、そこには官能的で洗練された味覚快楽を追求する「美食派」や、ストイックな食をおして「人生派の哀歓」を描こうとする「粗食派」の文学とはかけ離れた、「歴史タンテイ」(『歴史探偵方法論』一九五一・一〇『新潮』)的視点が感得できることを指摘しておきたい。

ところで、食の光景が象徴的に描かれた安吾作品は戦前にも存在する。川村湊は矢田の「茶粥の記」に登場する、食通を演じ続けた夫と彼の観念的身ぶりを許容する妻との関係に、安吾と彼女とを重ね合せているが<sup>(2)</sup>、「茶粥の記」の約一年後に『現代文学』一九四二年一月号に掲載された「古都」がその作品である。

「古都」は、書き下ろし長篇小説『吹雪物語』(竹村書房 一

九三八・七)を執筆するために、安吾が京都に滞在した期間(一九三七・一)―一九三八・六)の出来事を回想した自伝的小説である。年譜や安吾の言辞に鑑みれば、この「都落ち」が最愛の女性矢田津世子との決別に端を発するといいういささか浪漫的な憶測も成立つようだ。<sup>3)</sup> ことの真偽はさておき、安吾が京都に続いて取手や小田原といった地方を転々としつつ、「文学のふるさと」(『現代文学』一九四一・八)や「日本文化私観」(『現代文学』一九四二・三)など卓越した評論を世に問うたことは、この流浪経験が「安吾に一つの転機をもたらした」<sup>4)</sup>と推測するに足る事実である。そこで本稿では、「都落ち」生活のごく初期を描いた「古都」「孤独閑談」<sup>5)</sup>を取り上げ、作品内における食が、安吾とおぼしき作中人物「僕」にもたらす変容に照明を当てることで、作品自体の読みにかかわる食の言説について検討したい。

## 二 「古都」における食の寓意 反転する食行為

すでに述べた通り、「古都」と「孤独閑談」は一九三七年一月から三八年六月まで、約一年半に及ぶ京都生活を描いた、安吾の自伝的小説である。そもそも、この「都落ち」がいかなる理由で決行されたものであるのか、まずは「古都」の冒頭部を引いてみよう。

京都に住もうと思ったのは、京都という町に特に興味が

あるためではなかった。東京にいたことが、ただ、やりきれなくなったのだ。住みなれた下宿の一室にいても厭で、鶴殿新一の家へ書きかけの小説を持ち込み、そこで仕事をつづけたりしていた。京都へ行こうと思ったのは、鶴殿の家で、ふと手を休めて、物思いに耽った時であった。

「竹村書房から出版することになって」いる「書きかけの小説」とは、竹村書房版『吹雪物語』の本文末に「一九三六年十一月廿八日起筆」とあること、尾崎一雄宛はがき(一九三七・一・三一消印)に「実は先年十一月より小説を書きはじめ、あと半年ぐらいで脱稿の予定」とあることから、『吹雪物語』を指しているのは間違いない。この時の経緯は、戦後に再版された新体社版『吹雪物語』(一九四七・五)巻末の「再版に際して」(以下「再版に際して」と略記)にも記されている。

昭和十二年、丁度、節分の前夜であったと思う。私はひとり京都に向かって出発した。「……私は孤独を欲したのだ。切に、孤独を欲した。知り人の一人もおらぬ百万の都市へ屑の如くに置きすてられ、あらゆるものの無情、無関心、つながりなきただ一個、その孤独の中で、私は半生を埋没させて墓をつくる仕事をし、そして、そこから生れ変わって来ようと切なる念願をいだいていた。

つまり、一九三六年十一月末に起稿された『吹雪物語』は、「半生を埋没させて墓をつくる仕事」として、三七年一月に京都に持ち込まれたことになる。しかしながら、十年もの年月を経た

「再版に際して」の記述に、記憶違いや誇張的表現があるのも否めない。例えば、都落ちの正確な日付について、「再版に際して」では、「昭和十二年、丁度、節分の前夜」とあるのに対し、『吹雪物語』脱稿直後に書かれたエッセイ「困暮修行」（『都新聞』一九三八・六・二二―二三）には、「書きかけの長篇小説の原稿をふところに入れて僕が京都へ行ったのは、去年の一月末日だった」とある。「古都」の「僕」も「昭和十二年早春。宇垣内閣流産（一九三七年一月二十九日 引用者注）のさなか」に京都に旅立っている。さらに、前掲の尾崎一雄宛はがきは「一九三七・一・三一本郷局消印」になっており、「どうしても仕事から頭を離す余地がありません。ところへ月末に窮し、金策のできるまでちよつと友人のところへ居候にでむかねばならぬ始末」という文面が確認できる。これらの記述を総合し、かつ節分の夜は嵯峨・車折神社で、神火の明かりに照らされた願掛石を見たという「日本文化私観」（『現代文学』一九四二・二）のエピソードも加味すれば、安吾が東京を発つたのは「節分の前夜」ではなく、尾崎一雄宛はがきを投函した後、一九三七年一月三十日、もしくは三十一日と考えるのが妥当である。また、この都落ちの動機には、『吹雪物語』よる自己救済という「切なる念願」のほかに、「月末にも窮す」といった経済的事情も加えられるべきであろう。

さて、出立の夜、送別の宴で「僕」は尾崎士郎夫妻と竹村書房編集者の大江勲に「両国橋の袂の猪を食わせる家」に連れて

行かれ、その席で初めて猪を食した。

飾窓に大きな猪が三匹ぶらさがっていた。その横に猿もぶらさがっていたが、恨みをこめ、いかにも悲しく死にましたという形相で、とても食う気持にはなれない。猪の方は、のんびりしたものである。ただ、まるまるふとり、今や夢見中で、夢の中では鉢巻をしまてステテコを踊っている様子であった。

「少し臭味があるが、特に気にかかる程ではない。驚くほどアツサリしていて、いくら食ってももたれることがない」という尾崎の注釈に従い、「僕」は猪を「無限に食った」のだった。

その夜のことは、戦後になって書かれた尾崎士郎宛の書簡（一九四五・九・二九付）に「私が京都へ立つ夜、あなたがモンチ屋へ案内してくれた」と記され、尾崎士郎も小説「睡眠薬と覚醒剤」（『小説新潮』一九五八・四）の中で、次のとおり回想していることから、事実とみて差支えない。

数年前、ももんじ屋へいった晩のことは、昨日の出来事のように、まだ私の頭にこびりついている。「……」安吾はいよいよ、東京の生活が行きつまって、一つの作品を書き上げるために京都にいる彼の友人を訪ねてゆく決心をしたばかりのときだった。「……」そのとき、三人のあいだにある鍋の中では猪の肉が、ジ、ジと音を立てて焦げついていた。

尾崎によれば、鍋の中には「肉はおるか、猫が食べたように豆

腐も葱も、蒟蒻のひとかけらさえも残ってはいなかった」という。こうして、猪を「無限に」食べた「僕」＝安吾は「千枚ばかりの原稿用紙だけ」を持って京都に旅立つ。しかし、「僕」と猪との縁がこれで切れたわけではなかった。京都に到着した「僕」は、友人にして、雑誌『紀元』の主宰者でもある隠岐和一を頼って、嵯峨の彼の別宅に一ヶ月ほど逗留する。その時、再び猪に合間見えたことが「日本文化私観」に記されているのだ。

(隠岐に何が好きかと尋ねられ 引用者注)僕は祇園の舞妓と猪だとウツカリ答えてしまったのだが まったくウツカリ答えたのである。なぜなら、出発の晩、京都行きの送別の意味で尾崎士郎に案内され始めて猪を食ったばかりで、もののハズミでウツカリ言ってしまったけれども、第一、猪の肉というものが手軽に入手出来ようなどとは考えていないせいでもあった。ところが、その翌日から毎晩毎晩猪に攻められ、おまけに、猪の味覚が全然僕の嗜好に当てはまるものではないことが、三日目ぐらいに決定的に分ったのである。けれども、我慢して食べなければならなかった。

猪は東京を発つ晩に「無限に」食べられ、京都に到着してからも連日連夜食べられなければならなかった。結論を先に述べれば、本稿の要諦の一つは、このように 都落ち した「僕」が猪食いという、いわば通過儀礼(食)を経て、伏見＝「動物」的世界へ参入するという点にある。つまり、この執拗な猪食いの描

写は、食を媒介にした異界巡りの始まりを告げるものなのである。

その後、安吾は隠岐の叔父の斡旋で、嵯峨から伏見区稻荷鳥居前町の中尾会計事務所の二階に移転するも、その会計士が立ち退きを命じられたことにもない、一九三七年六月九日頃、同区深草町一之坪の上田食堂二階に仮寓、そこで一年余りを過ごすことになる。「僕」の視点から、食堂二階の暮会所に集う奇矯な人物群像や、家出した食堂の養女の捜索にまつわる出来事を描いた「古都」「孤独閑談」は、この食堂を舞台としている。それでは、「僕」のたどり着いた伏見の露路がいかなるものであったのかみていくことにしたい。

溝の溢れた袋小路。昼も光のないような家。いつも窓はとじ、壁は落ち、傾いている。溝からか、悪臭がたちこめ、人の住む所として、すでに根本的に、最後を思わせる汚さと暗さであった。

この町の悪臭は溢れ出した溝から漂ってくるだけではない。半ば公然と鶏肉として売られている兎の肉や、「京都のゴミ溜まり」の住人たちの体臭が露路全体を覆っていたはずだ。このような伏見の猥雑な様相は、「僕」をとりまく人々の姿と重なり合う。

隣りの二階は女給の宿で赤衣着物がブラ下り、その下は窓の毀れた物置きで、その一隅に糸くり車のブンブン廻る

工場があつた。裏手は古物商の裏庭で、ガラクタが積み重なり、二六時中拡声器のラジオが鳴りつづけ、夫婦喧嘩の声が絶えない。

そこで「僕」を戸惑わせるのは、露路の住人たちの情緒や愛情の抜け落ちた「動物」的なありよう、倫理的道德から逸脱した関係性である。食堂の主婦は鼻息の荒い「驛馬」、「軍鶏」のような嬌声、相手の急所を本能的に知り尽くした「カマキリ」に喩えられ、その「肉体」は自らの平安のみに執着し、身悶えている。一方、老舗和菓子店の妾腹として生れた親爺は、曲った腰と這つて移動する姿から「海老」になぞらえる。彼は妻子ある身であつたが、家督を譲つて家出をしていた。「世の常の結婚ではない」「二人の間には十七歳になるアサ子という養女がいる。彼女は義母と「動物の本能」で憎みあい、「動物性の横溢した」喧嘩の末、家出をする。それは、「僕」の提案で開業した暮会所に群がる常連客についても同様で、「僕」の観念の及ばない「動物」的光景は「百鬼夜行」と自嘲的に語られている。このような「獣性」は、「僕」が伏見に来る直前に食した猪とアレゴリカルに結びつき、同時に猪が露路の人々の「動物」的地位を先取りしていることを示しているよう。

さて、「書きかけの長篇」を完成させようと京都までやって来た「僕」は、当初「ただ命をつなぐだけなら、俺にはこの方がいいのだ。光は俺自身が持つより仕方がない」と、「人生の最後の袋小路」の情景に自分自身の境遇や心象を重ね合わせて

いる。だが、彼の胸に宿っていたはずの光は、いつしか「一筋の光も射してこない暗い一室」の中で消え、机の上には埃のたまった原稿用紙が放置されていた<sup>(7)</sup>。「百鬼夜行の統領」になつて暮に明け暮れる「僕」は、「二十円」という経済価値にか還元できない、まさにただ命をつなぐだけの「手数省けた生活」をしている。衣・食・住にしても、「東京を着て出たままのドテラと、その下着の二枚の浴衣だけ」で過ごし、上田食堂で間借りしながら、一食十三銭の弁当を一日二食、一本十二銭の酒を毎晩好きだけ飲み食いしていたという。ここで、「僕」の食はただ空腹を満たすために「一食十三銭」以上でも以下でもないものとして消費され尽くし、彼の生にそのまま直結していく。

たらふく飲み、たらふく睡り、二十円ぐらいで生きていられるのであつた。考えるということさえなければ、なんという虚しい平和であるうか。しかも、僕は、考えることを何より怖れ、考える代りに、酒をのんだ。いわば、二十円の生活に魂を売り、余分の金を握る度に、百鬼の中から一鬼を選んで率き従えて、女を買いに行くのであつた。

「僕」は思考という人間の基本的な営為を捨て、露路の人々と同等の「動物」的存在に成り下がろうとする。「僕」がこの場所で「坂口」という固有名を失った「名無し男」となり、「先生」という単なる記号的呼称でしか認識されないのも、彼の位相に鑑みれば、もっともな話なのである。そして、このように、思

考も名前さえも放擲し、「虚しい平和」に甘んじるその姿は、「モンチ屋」の飾窓に吊るされた猪の「まるまるふとり、今や夢見中で、夢の中では鉢巻をしめてステテ」を踊っている様子」と重なり合っているのである。<sup>(80)</sup>

ところで、フォイエルバッハが「人間は彼が食べるところのものである」<sup>(81)</sup>と述べたように、食べられたものがそれを食べた者の身体になるという思想は、例えば、キリストの血と肉に見立てた葡萄酒とパンを口にする<sup>(82)</sup>ことで、その聖体を象徴的に拝領する聖餐の儀式に最も端的に表れている。また、そのような思想は古代のアニミズム的な生命観・身体観にも通じている。益田勝実は古代日本における「ミ」という言葉が、食用となる動物の身、穀物や果実の実、および「を食べる人間の身から来ていることを指摘したうえで、「自己自身のミと、外在するミとを、どちらもミといったのだ」と述べている<sup>(83)</sup>。ここで想起されるのは、『古事記』における「黄泉戸喫」のエピソードであろう。黄泉国の火で作った食べ物を食したイザナミは、彼女の身体が黄泉国のそれへと変化してしまったことにより現世に帰ることを断念しなければならなかった。それは、口を媒介に異物として摂取した外部が、そのまま内部そのものと化していくという、食物＝ソトと身体＝ウチとの連続性・同質性を示唆している。

この思想を敷衍するならば、「夢の中では鉢巻をしめてステテ」を踊っている「よつな猪を食らった「僕」であればこそ、

伏見という「動物」的世界への参入を許され、「彼が食べるところのもの」となっていたのではないか。「少しも歩かずに食って酔っ払って、ねむって、一月二十円ぐらいで生きていられる」という「僕」の思考停止の状態は、「再版に際して」では、情眼を貪る「豚」に擬せられ、「ぐうたら戦記」(『文化展望』一九四七・一)に至っては、「ひとかけの糞のかたまり」に喩えられる。ここにきて、「僕」はもはや猪ですらなく、「糞」という排泄物になってしまつのである。やや飛躍した言い方になるが、「僕」の中に一度取り込まれた猪の血肉は、「僕」を「動物」的な露路に参入させ、「食べる」ところのもの、「食べられたもの」さながらの生を「僕」に与えた。そこには、食べる食べられるの二項対立を超えた相互交換の可能性が示されている。だが、猪になつたはずの「僕」自身が、最終的に「糞」という老廃物に転位してしまうことを思いあわせれば、猪肉に隠喩される伏見の「動物」性は、最終的には「僕」の体内に摂取され得なかつたことが看取できるのである。

結局のところ、「僕」は真正の露路の住人になりきることはできなかつたと言わなければならない。もちろん露路を出る直接的な理由は長篇小説がようやく完成したからにすぎない。とはいえ、一人称の叙述スタイルでありながら、露路の周縁から内部へ向けられた徹底した三人称的視点、あるいは伏見を去る「孤独閑談」の最終場面で発せられる「可憐なる人々よ。さよう

なら」という決別の言辞には、「僕」が露路の住人としての生を享受することの不可能性が窺われる。また、先の「ぐうたら戦記」では、遂に「動物」になり得ない自らを次のように述懐していることも看過できない。

一月二十円の生活に魂を売った人間で、昼頃起きて物を食い、夕べに十二銭の酒に酔っ払ってゴロリとねむる酒樽のでき損いのような人間なのだ、と、どうしてそれを信じるのが出来ないのだろう。事実それだけの人間ではないか。しかも、どうしてそれを信じるのが出来ないのだ。

このように「永遠に墮ちぬくこと」「墮落論」一九四六・四『新潮』のできない「僕」のありようを念頭に置けば、隠岐和一の家で「嗜好に当てはまらぬにもかかわらず、「我慢して食べなければならなかった」という猪は、結局「僕」の身体に血肉化されなかつたといえる。先述したとおり、「僕」が排泄物と化してしまう「ぐうたら戦記」での比喩が、そのことを裏づけていよう。ならば、「僕」の帰京時に、上田食堂の主婦が汽車の窓から投げ入れる「八橋」あまりに月並な京都土産は、彼の「切なる念願をいだいていた」京都行が、修学旅行のように一回的で陳腐なものでしかなかったことを事後的に示してはいないだろうか。

以上、「猪」で始まる「古都」と「八橋」で終わる「孤独閑談」とを、食行為を媒介に作中人物が異界に去来する物語として読むと、伏見というトポス自体が一つの巨大な内臓に捉えられる

と言えなくもない。四方に交差する露路、京都・大阪・奈良を結ぶ水路と陸路、朱塗りの鳥居が連なる稻荷大社を、身体にはり巡らされた毛細血管や器官に見立てることは容易である<sup>(11)</sup>。そこで、猪を食べ、十三銭の定食を食べ、フグを食べ<sup>(12)</sup>、十二銭の酒を飲み、常に食べる側であった「僕」は、一方で伏見に飲み込まれ、吐き出されたという意味で、伏見という胃袋には食べられない存在でもあると指摘できる。あるいは、猪肉を消化できなかった「僕」が、「動物」的世界である伏見から逆に排出されてしまったと換言することもできよう。いふならば、この二作は、「僕」の「食べる」物語を、「僕」が「食べられる」物語が覆っていると同時に、「僕」の「吐き出す」物語を、「僕」が「吐き出される」物語が覆つたという、錯綜した入れ子構造を持つていのである。そして、その構造自体が、異物を口に運び、咀嚼嚥下し、内臓で消化し（消化不良を起こし）、排泄（嘔吐）するという一連の食の行為におけるウチとソトの連絡／顛倒を描出している。

### 三 共食というイデオロギー

確認してきたように、「古都」や「孤独閑談」における「僕」の視線は、露路での出来事や住人の行状という内部に注がれたベクトルで構成されている。ただし、「僕」の視線が外部へ転

じる瞬間が対比的に設定されていることは注意しておくべきである。主人公の個人的な事情と国家的時局とを対置させながらプロットを成す手法は、「真珠」(『文芸』一九四二・六)に明確な形で継承されるのだが、「古都」では「僕」が東京を発つ冒頭部分に「自動車が発車する時、警戒の憲兵が物々しき「た」という「宇垣内閣流産事件」が挿入されている。宇垣一成による組閣が石原莞爾率いる陸軍・参謀本部幕僚の強い反発のために断念を余儀なくされたこの出来事は、軍部の独裁性を一層強め、日中戦争、太平洋戦争へと突入する一つの契機となった。「古都」においても、「日支事変」の勃発にともなって、軍需品として師団に納める八ッ橋を箱詰めする食堂の親爺の姿が描かれている。

そもそも、伏見・深草は一九〇八年から帝国陸軍十六師団の駐屯地が置かれ、百万平方メートルに及ぶ区域が司令部や大隊のほか、練兵場や衛戍病院などの付帯施設で占有される帝国陸軍の拠点であった<sup>(13)</sup>。さらに一九二二年と一四年、日本の近代帝国化にとって強大な存在であった明治天皇と昭憲皇太后が相次いで崩御すると、伏見桃山に二人の御陵が治定され、麓に創建された乃木神社と併せて戦前には夥しい参拝客を誘致した<sup>(14)</sup>。つまり「古都」と「孤独閑談」は、伏見の露路内部が近景としてクローズアップされながら、遠景には戦争という外界が配置されたテクストであり、さらにその遠景を構成するのは軍隊と天皇という近代国家権力の磁場なのである。この

ように露路内部における個人的な状況と、露路外部における社会的状況とに向けられた「僕」の視界に、戦時下の食という外的状況が入ってきても不思議はない。むしろ、その観点は「古都」「孤独閑談」読解の補助線として用いることができよう。

「相互に無関係な個人が、統一的な目的に向かって行動をとる」という性質を持つ戦争は、国民にとって「食」をめぐる新しい体験の場でもあった<sup>(15)</sup>。同じ栄養を全ての兵士に供給し、均一な身体改良が要求される戦場の食は、国民生活にも波及し、食行為にともなう精神的な結束感をより強固なものにしていく。だが、充分かつ均質な栄養を全国民に供給することなど望めるはずもなく、一九三八年「国家総動員法」公布により白米廃止運動が高まると、国策代用品普及会は麦から粟や稗への置き換えを喧伝する。翌二九年には「興亜奉公団」「食糧統制」の下、嗜好品贅沢品はもちろん一般家庭の料理品目までもが自粛の対象となり、砂糖相場も米相場も閉鎖される。こうして戦況が厳しくなるにつれ、隣組結成や配給制度、物価統制など、一切の不公平感を生み出さないための全体主義システムが徹底されると同時に、耐乏生活を乗り切るための啓発運動が様々なメディアをとおして拡大されていった。要するに、国民生活の中核を成す食の領域に管理と均等化を強い、「銃後」という共有意識を植えつけることが、「一億玉砕」精神を準備したと言えるのである<sup>(16)</sup>。

さて、「古都」や「孤独閑談」の作品内時間である一九三七年

は、日本が大戦に乗り出す時期ではあるが、それほど緊迫した様子は見られず、「僕」は牛飲馬食をし、時にはフグなどの高級品を食べたりもしている。しかし、ここで着目したいのは食における場の問題である。戦争中に限らず、共同体のアイデンティティを保持するための食は、「家族」という社会の最小単位で一般的には享受されていたはずだ<sup>17</sup>。古来、共食が儀式や祭礼に欠かせないのも、神と人の関係、あるいは人と人との関係における共同体意識を再確認し、強化するのに有効であるからであり、家族と同じものを同じ時・空間で食す行為はその最も日常的な表れであった。だが、東京から逃げ出してきた「僕」をはじめ、上田食堂の親爺、食堂の養女や不良少女、職場から逐電した暮会所番人の関さん、故郷を追い出されて食堂二階に間借りするノンビリさんら、「古都」と「孤独閑談」に登場する人々のほとんどは、一般社会や故郷から疎外され、帰るべき「家」を失った者ばかりである。そのような彼らの食が個(孤)食であることは想像に難くない。たとえば「孤独閑談」の次の場面は、「家」を失った者たちの食の場の様相を喚起させるものである。食堂夫婦から家出した養女アサ子の搜索を依頼された「僕」は、京都市内の不良少年のたまり場を訊ね歩く。その日は、ちょうど大晦日であった。

京都では大晦日の深夜から元旦の早朝へかけて、八坂神社の神火を三尺ぐらいの縄にうつし、消えないように調子をつけて振りながら之をブラ下げて家に帰り元旦の竈の火

をつけるという習慣がある。僕達が酔っ払って外へでると、道の両側の人道はすでに縄の火をブラ下げた人達が蜿蜒と流れつづいている。家すらもないということ、曾てそのことに悲しみを覚えた記憶のない僕だったのに、なぜか痛烈に家がないということを感じたのだった。

現在も「白朮詣り」として知られるこの祭祀では、吉兆縄の白朮火を火種に元旦の雑煮を炊き、新年の除災招福を祈念する<sup>18</sup>。このように、火の浄化力と再生力を神聖視し、竈という聖域で炊いた雑煮を家族揃って食す火替えの風習には、旧年から新年への再生感を家族一同で感受し、共同体を確かなものにするという意味が込められている<sup>19</sup>。先の「古事記」における「黄泉戸喫」神話も、同じ竈の火で作った食べ物を食すことの中に、同化の思想が宿っていたのだろう。「僕」を突然襲うこの孤独感は、神火の連なりが各々の家庭に続き、家族の食を司る「竈の火」へと変換されることでいっそう強調される。共同体にとって、共食が戦争や祭礼といったハレの場に欠かせない重要な意味あいを持っている以上、そこから抜け落ちた人々は、「蜿蜒と流れ」続く人々と決別し、共食のイデオロギーに搦めとられない場で、一人食べ物を飲み下すしかない。それは、この物語を構成する家出人たちが個(孤)食に象徴される自己のありようを、そのまま受容しなければならぬということでもある。

## 四 おわり

以上、「古都」「孤独閑談」の「僕」が伏見に來訪してから去るまでを食の言説から検討し、食の行為を通して「僕」のウチとソトが連続し、食べる 食べられる、吐き出す 吐き出されるの関係が反転する構造を明らかにしてきた。さらに、伏見というトポスや時代状況をそこに重ね合わせれば、より複雑な問題が前景化するはずだ。その問題は作品の解釈にとどまらず、坂口安吾の作家的変貌の内実にも関わる問題である。「ともかく今日につづく、やや確信的な何か、表現すべき何かに就いて信念と自覚を持ち得たのも、『吹雪物語』によってでなしに、[...]その京都に於ける絶望の生活からの内省と、その脱出のための苦しみの結果」(「再版に際して」)であったという安吾自身の評言に沿うならば、この「絶望」の時期の作品化である「古都」は、その二ヶ月後に発表され、安吾の「生き方を確立した」(『墮落論』後記 一九四七・六 銀座出版社)という「日本文化私観」を既に準備していたのではないだろうか。そのことを検討するにあたっては、登場人物の位相、露路の世界観という点で看過できない共通性を持つ「白痴」(『新潮』一九四六・六)を併置しながら<sup>(2)</sup>、より巨視的に個々の作品を分析する必要があるが、別稿を期したい。

注(1) 大河内昭爾「貧しき美食家」(『新潮45』一九八九・一一

二二四 一三三三頁)、「文学にみる粗食派と美食派」(味の素食の文化センター『講座食の文化』第六巻 一九九九・九四〇〇 四一五頁)等参照。

(2) 川村湊「安吾の恋」(『早稲田文学』二〇〇〇・五五四頁)

(3) 『吹雪物語』再版に際して「の評言によれば、矢田と別れた後、安吾は「過去を埋没させ」、「そこから生れ変わるつもり」で『吹雪物語』を構想し、京都へ赴いたという。なお、『吹雪物語』には矢田をモデルにした古川澄江という人物が登場する。

(4) 浅子逸男「無可有郷の人々」(『坂口安吾私論』一九八五・五 有精堂 九九頁)。このほか、檀一雄は京都市が安吾の文学に「決定的な正覚を与えた」(創元社版『坂口安吾選集第三巻』解説)とし、花田清輝も「動物・植物・鉱物」(『人間』一九四九・一)で「かれの芸術の形成に大きな役割を果たした」と述べている。

(5) 「孤独閑談」は「古都」の続編として読まれてきたが、初出掲載誌未詳の作品であった。しかし、七北数人は『評伝坂口安吾 魂の事件簿』(二〇〇二・六 集英社 一四三 一四四頁)において、短篇集『真珠』(一九四三・一〇 大観堂)に書き下ろした作品と指摘している。

(6) この事情は、「古都」の「僕」が移り住んだ伏見稻荷を

「京都でも一番物価の安い所」と強調し、自分の生活費を繰り返し披瀝することと呼応している。

- (7) 『吹雪物語』の執筆状況については、自筆原稿(函館図書館蔵)に付された日付メモをもとに調査紹介した関井光男の『吹雪物語』について(冬樹社版『定本坂口安吾全集』第二巻 一九六八・四)がある。

- (8) 本稿とはやや観点を異にするが、(4)の花田清輝は、『古都』の冒頭部分に描かれているように、「…」出発にあたり、猪の肉で送別の宴がはられたのは象徴的」と述べたうえで、「肉体と精神」の相克に執着し続ける安吾を、垂れ耳の「豚」(肉体性の隠喩)でも、口先の長くとがった「猪」(精神性の隠喩)でもない「猪八戒」に喩えている。

- (9) 船山信一訳「犠牲の秘密」(『フォイエルバッハ全集』第三巻 福村出版 一九七四・七三三 七二頁)参照。

- (10) 益田勝実「古代人の心情」(東京大学出版会『講座日本思想』1 一九八三・一〇一三頁)

- (11) 伏見の歴史や文化については、聖母女学院短期大学伏見学研究会篇『伏見学ことはじめ』(一九九九・六 思文閣出版三四一 三四六頁)、同『伏見の歴史と文化』(二〇〇三・四 清文堂出版三八 三九頁)等を参照。

- (12) 家出した上田食堂のアサ子や不良少女たちにふりまわされた「僕」は、半ば自棄になってフグを食べたという記述が「孤独閑談」や「探偵の巻」(一九三八・一一・二四)～二六『都新聞』)にある。

- (13) 「古都」の「僕」が仮寓した中尾会計事務所は「火薬庫の前」であったという。

- (14) 前掲(11)の資料の他、『京都伏見歴史紀行』(一九八三・九 山川出版社 七四 七九頁)や『史料京都の歴史第十六巻』(一九九三・一 平凡社 五三 五九頁)等参照。戦前、御陵への参拝者は多い時で年間三〇万人に及び、国鉄桃山駅は、奈良線停車場中最大乗降客駅を誇っていたという。

- (15) 村瀬士朗「食を道楽にする方法」(『ディススクール』の帝国』二〇〇〇・四 新曜社 一六五 一九八頁)

- (16) 下村道子「戦中・戦後の食の実態」(『横浜の食文化』一九九二・三 横浜市教育委員会 八九 一九九頁)は、食生活啓発活動として節約と工夫を奨励した『決戦食生活工夫集』(一九四四 神奈川県食糧営団)を紹介し、第二次大戦中における横浜市民の食生活を細密に調査している。

- (17) 例えば、『主婦之友』一九三八年一〇月号は「家庭の力は御国の力」という標語を掲げ、銃後における家庭の一致団結が国力に直結することを強調している。このキャンペーンの一環として、「非常時にふさわしく」、「全家庭に推奨」できる「銃後の家庭料理」の献立が懸賞金付きで公募された。このように戦時下の共食の場は、一般読者を巻き込んだメディアと連動しつつ再編成されていたのではないか。

(18) 『日本民俗大辞典(上)』(一九九九・一〇 吉川弘文館  
二五三―二五四頁)に拠る。

(19) 世界各国の 火祭り については須山善幸『炉の生活史』  
(一九八九・十二 三省堂 一五四頁)、竈については神  
崎宣武『台所の原風景』(味の素食の文化センター『講座食  
の文化』第四巻 一九九九・七 四八―五七頁)をそれぞれ  
参照した。なお、藤田元春『増補日本民家史』(一九三  
七・二 刀江書院 三一五―三三八頁)によれば、京都は  
「かまど文化」の特に根強い土地であり、ガスが普及した  
昭和になっても、竈そのものを火の神として祭る風習が  
あったため、容易に撤去されなかったと伝えている。

(20) 「古都」と「白痴」との関連性は、大原祐治『豚並みに生  
きること』(『学習院高等科紀要』二〇〇三・六 四三頁)等  
で既に触れられているが、いずれも共通点の指摘に留まっ  
ている。

**付記** 本文の引用にあたっては、ちくま文庫版『坂口安吾全  
集』を用いた。なお、ちくま文庫版に所収されていない作品は  
筑摩書房版『坂口安吾全集』に拠り、その際、新字新仮名遣い  
に改め、ルビは適宜省略した。また、引用文中における傍線・  
傍点は全て引用者によるものである。